様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １８ 日現在

機関番号：２３８０３
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１２８３７

研究課題名（和文）アクシオン・フランセーズとキリスト教知識人―宗教思想を通じた政治思想の再解釈

研究課題名（英文）L'Action francaise and Christian Intellectuels: Reinterpretation of French Political Thought through Religious Tought

研究代表者
西村　晶絵（NISHIMURA, Akie）

静岡県立大学・国際関係学部・講師

研究者番号：４０８４３８００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、1890年代半ばから1930年代初頭のフランス政治思想を、「宗教」というキーワードを通じて捉え直そうとしたものである。具体的に取り上げたのは、アクシオン・フランセーズの中心的論客としてカトリック擁護の立場をとったモーラスとマシス、カトリックのクローデル、マリタン、そしてプロテスタントのジッドである。彼ら相互の関係性は、結局のところ、政治思想および文芸思想とも密接に結びつくキリスト教思想の懸隔によって説明されうることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
1890年代半ばから1930年代のフランス政治思想に関しては、従来、強いカトリック志向を示す国粋主義のアクシオン・フランセーズと、脱宗教を掲げる共和派の左派という対立構造で捉えられてきた。それに対して、本研究は、キリスト教知識人たちから示された極右政治思想団体アクシオン・フランセーズに対する反発や接近の立場を、彼らの宗教思想をもとに解き明かすことにより、アクシオン・フランセーズへの反発がクローデルやジャック・マリタンといったカトリック系保守の知識人からも引き起こされていたこと、またジッドをはじめとするプロテスタントの側からアクシオン・フランセーズへ接近する動きがあったことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study attempts to recapture French political thought from the mid-1890s to the early 1930s through the keyword “religion. Specifically, we focus on Maurras and Massis, who took a Catholic advocacy position as the main exponents of the l'Action Francaise; Claudel and Maritain, who were Catholics; and Gide, who was a Protestant. The relationship between them can be explained, after all, by the suspension of Christian thought, which is closely linked to political and literary thought.

研究分野：フランス政治思想

キーワード：アクシオン・フランセーズ　シャルル・モーラス　アンドレ・ジッド　キリスト教思想

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

1894 年のドレフュス事件は、フランス国内を反ドレフュス派とドレフュス派に二分した。反ドレフュス派の象徴的存在となったのは、国粋主義団体アクシオン・フランセーズ（以下、AF）に加わった極右思想家のモーラスやマシスである。政治同盟の AF は、古典文芸の復興を目指す文芸批評運動でもあったが、多くの信奉者を生み出す一方、あまりに排外主義的な主張ゆえに激しい批判をも巻き起こした。AF の対抗軸としてドレフュス派に立ったのは、ゾラや A・フランスといった左派知識人である。彼ら左右両派の中心的論客の政治思想については、これまでも多くの研究がなされてきた。（Vincent Duclert, *L'affaire Dreyfus et la gauche*, 2005 ; Laurent Joly, *Naissance de l'Action française*, 2015 等）。

だが、左派対右派の対立構造は確かに存在したにせよ、極端なナショナリズムを煽るうえで教皇庁と密接に繋がろうとした AF には、カトリック系保守の知識人から厳しい批判が向けられた。また、AF との関係でいえば、プロテスタントから示された接近と離反の動きにも注目する必要がある。彼らは宗教的な価値観の異なりからカトリック系保守とは対立関係にあったが、反プロテスタントを標榜していた AF には一時的にせよ接近した。

政治的立場を巡るこれらの複雑な関係性に鑑みれば、反ユダヤの右派とユダヤ擁護派の左派の対立という従来的な時代状況の把握は、政治や宗教を巡る多様な立場を捨象してしまうという点で不十分である。キリスト教知識人たちと AF の間に存在する複雑な関係に注目し、それを彼らの宗教思想と関連付けて説明することで、左派対右派に還元されない政治思想の一側面を浮かび上がらせ得るのではないかという問いが本研究の背景をなしている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ドレフュス事件の起こった 1890 年代半ばから AF が衰退する 1930 年代初頭に関し、AF、カトリック系保守、プロテスタント系それぞれの作家・思想家たちのキリスト教思想と政治思想の連関を検討し、それをもとに彼ら相互の関係の特徴を解き明かすことで、左派と右派の二項対立に単純化され得ない当時の政治思想の複雑な状況を浮かび上がらせることにある。

3. 研究の方法

①AF の宗教・政治思想とその影響力の解明

AF の創設にかかわった文筆家のモーラス（1868-1952）と、AF の中心的論客であった批評家マシス（1886-1970）を分析対象とする。彼らが国粋主義的な政治思想を示すうえでカトリック信仰がいかに根拠として提示されるのか、そのロジックを検討する。さらに、プロテスタントやユダヤ教といった他宗教を排除する思考のプロセスについても検討を行う。また、彼らの政治思想に対する応酬・反響についても検討し、彼らの主義・主張が、当時のフランス社会でいかに受容されたのかを明らかにする。

【１　研究目的、研究方法など（つづき）】

②カトリック系保守の宗教・政治思想とその影響力の解明

カトリック作家として圧倒的な存在感を示していた劇作家クローデル（1868-1955）と、重要なトマス派の宗教哲学者マリタン（1882-1973）を分析対象とする。彼らによる AF の宗教思想・政治思想に対する批判やその論点から、AF とカトリック系保守の間の宗教思想と政治思想の差異を検討する。また、どのような教会や聖職者が彼らに支持を表明したのか、あるいはどのような点から支持を得られなかったのかを明らかにし、カトリック系保守とカトリック教会の関係性の特徴を明らかにする。

③プロテスタント作家の宗教・政治思想とその影響力の解明

カトリックの知識人との交流や反目によってその思索が形成されてきた作家ジッド（1869-1951）を対象とする。プロテスタントでありながらも、反プロテスタントの立場を掲げる AF にジッドが接近していったという事実を踏まえ、その経緯とその後の離反に至るまでの過程を、宗教思想に着目して明らかにすることを試みる。また、ジッドとカトリック系保守の間に見られた宗教思想の懸隔と、それによって引き起こされていたと想定される政治的立場の対立の様相についても検討する。さらに、彼がプロテスタントの知識人として彼らいかに社会と関わろうとしたのか、宗教的マイノリティであることが政治思想にいかなる特徴をもたらしたのかを明らかにすることを試みる。

4. 研究成果

①AF の宗教・政治思想とその影響力の解明

まずは、AF における国粋主義的な政治思想において、カトリック信仰がいかに根拠として提示されるのか、そのロジックを検討した。具体的には、モーラスの『アクシオン・フランセーズとカトリック』（1913）と『宗教的民主主義』（1921）、またマシスの『審判』I、II（1923, 24）と『西欧の擁護』（1927）、さらには AF の機関紙『アクシオン・フランセーズ』を主なテクストとして分析し、さらに、プロテスタントやユダヤ教といった他宗教を排除する思考のプロセスについても分析を行った。

AF においては、革命以前の伝統的で権威的な王政に基づくフランスの復興が目指すべき社会と位置づけられていた。にもかかわらず、彼らによれば、現状のフランスは「ユダヤ人、フリーメイソン、プロテスタント、在留外国人」という四つの敵によって破壊されつつある。そこで、古代ローマから続くフランスの伝統としてのカトリックの復権を通じて、「古き良きフランス」の復活を図る必要があるのである。

こうした AF の主張に対し、当時のカトリック教会は、その存在を支持する立場を示した。これは、1905 年の政教分離法の制定に見られるように、カトリック教会がフランス社会での存在感を失いつつあったこととも関係している。教皇庁が正式に AF を承認する立場を示すようになると、多くのカトリック信者がその信奉者となり、AF の支持者の重要な母体として機能するようになった。こうした両者の関係は、教皇庁が立場を変ずる 1926 年頃まで続き、AF の勢力拡大において、カトリック教会が重要な役割を果たしていたことを明らかにした。

【1　研究目的、研究方法など（つづき）】

②カトリック系保守の宗教・政治思想とその影響力の解明

カトリック作家系保守のなかには、当初 AF に対して接近し、のちに離反したマリタンのような人物と、クローデルのように当初から一貫して批判的な態度を示した知識人がいた。こうした差異に注目し、カトリックの知識人たちが AF をいかに捉え、それが彼らの宗教思想とどのように結びつくのかを検討した。

マリタンが 1920 年代半ばまで AF やそのメンバーと親しい関係にあり、彼らによって示される政治思想を支持する立場を示していたのは、AF に対する教皇庁の立場や、マリタンに近しい友人たちが AF の支持者であったことに由来する。しかしながら、『シャルル・モーラスについての一見解とカトリックの務め』（1926）などに見られるように、1926 年頃からこの態度には変化が見られ、AF に対しての批判的な立場を強めていく。この背景には、排他的な政治思想やモーラスという個人崇拝の態度を危険視し、信者に対して AF との断絶を求めるに至る教皇庁の存在があった。以後マリタンは、AF は国家や政治を宗教の上位に位置づけようとした点で容認し得ないとして、この政治思想団体を強く非難するのである。

一方、一貫して AF に対して批判的であったクローデルは、当初から AF と教皇庁の蜜月関係に警鐘を鳴らしていた。実際、カトリック擁護の立場を示した AF のモーラスは、カトリックの信仰を持っていたわけではなかったからである。熱心なカトリックであったクローデルは、マシスをはじめとするカトリックの保守派から批判を受けながらも、AF やモーラスの親カトリックの態度が信仰に基づかない偽りのものであり、彼らがカトリック教会にとって危険な存在であると主張し続けていたことを、日記やマリタン、マシスなどとの往復書簡の記述を通じ浮かび上がらせた。

③プロテスタント作家の宗教・政治思想とその影響力の解明

反プロテスタントを掲げる AF に、プロテスタントのジッドが接近し、その後離反に至る経緯を明らかにすることを試みた。ジッドの日記やモーラスへ宛てた書簡には、文芸批評家としてのモーラスへの高い評価が認められ、1910 年代ごろまで、モーラスとジッドは友好的な関係にあったことが指摘できる。彼らには反ロマン主義の立場から古典主義を称揚するという類似点があった。さらにジッドは、モーラスの反プロテスタント、反宗教改革の立場にも一定の理解を示したが、これは組織としてのプロテスタントに対しては、ジッドもまた批判的だったからである。それゆえ、モーラスが 1909 年 11 月 4 日の「アクシオン・フランセーズ」紙に発表したカルヴァンに対する批判的な小論に対しても、ジッドは好意的に反応した。

だが、ジッドは 1920 年頃からモーラスの政治思想に対する批判を展開する。この離反の動きは、結局のところ、彼らの宗教思想の相違として説明できる。モーラスがカトリック復権を目指したのは、権威的で伝統的な組織として、フランスの立て直しを期待したからであった。しかしジッドにとって信仰は個人的なものであり、権威や組織によって縛られるべきものではない。また政治や社会においても同様で、モーラスは伝統や秩序を重んじたのに対し、ジッドは規則や慣習といったものからの解放を目指したのであった。そしてこうした宗教観の差異は、両者の「古典主義」の解釈の懸隔とも結びつく。モーラスにおいては秩序や規則を重んじ、形式を重視した芸術様式として捉えられている一方、ジッドにおいては異教的なものを取り込み、多様な要素の同化のうえに成り立つ芸術様式として捉えられているからである。文学・政治・宗教が分かちがたく結ばれている彼らの思想においては、どれか一点だけでも共通点を見出すこと自体が不可能であり、決別は避けがたいものであったことを明らかにした。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Akie NISHIMURA	４．巻 39
２．論文標題 L'Action francaise t les intellectuels chretiens : autour de Maurras, Maritain et Gide	５．発行年 2021年
３．雑誌名 盛岡大学紀要	６．最初と最後の頁 39-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 西村晶絵	４．巻 38
２．論文標題 アンドレ・ジッドとシャルル・モーラスー接近と離反の具体的様相ー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 真宗総合研究所研究紀要	６．最初と最後の頁 39－52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 西村晶絵	４．巻 42
２．論文標題 ジッドにおける「神」と「キリスト」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Stella	６．最初と最後の頁 113-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 西村晶絵
２．発表標題 ジッド、モーラス、マリタンの「キリスト教」と政治思想
３．学会等名 若手研究者セミナー（日仏文化講演シリーズ第352回）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計1件

1．著者名 西村 晶絵	4．発行年 2022年
2．出版社 彩流社	5．総ページ数 440
3．書名 アンドレ・ジッドとキリスト教	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関